

2007年度博士学位論文（要約）

## 古代日本人の名前の研究

桜美林大学大学院 国際学研究科 環太平洋地域文化専攻

潘 蕾

## 目 次

### 序章

- 一、本研究の三つの視点
- 二、研究対象と研究方法
- 三、先行研究

### 第 I 部 個人名の基礎的考察

#### 第一章 個人名の伝える情報と果たす機能

##### 第一節 個人名の伝える情報

- 一、実体情報
- 二、関係情報

##### 第二節 個人名の果たす機能

- 一、基本機能（一次的な機能）
  - (一) 個体の識別
  - (二) 交流の手段
- 二、派生機能（二次的な機能）
  - (一) 社会的分類
  - (二) 社会的整合
  - (三) 社会的分類と整合による制御と支配
  - (四) 社会的記憶の創出と補充
  - (五) 自民族の名詞システムの構築と補完

#### 第二章 日本の個人名の構成要素と種類

##### 第一節 日本の個人名の構成要素

- 一、音声
- 二、文字

##### 第二節 日本の個人名の種類

- 一、生前の名前
  - (一) 幼名
  - (二) 実名
  - (三) 通称
  - (四) 字
  - (五) 別号

- (六) 法名
- 二、死後の名前
  - (一) 諡
  - (二) 追号

## 第Ⅱ部 古代日本の個人名の考察——天皇家・貴族の名前を中心として

### 第三章 日本の個人名史における院政時代

- 第一節 本論文における院政時代の定義
- 第二節 日本の個人名史における院政時代の意義

### 第四章 院政時代における天皇家の名前

- 第一節 天皇の名前
  - 一、本論文における天皇家の定義
  - 二、天皇の名前
- 第二節 親王・王の名前
- 第三節 内親王・女王の名前
- 第四節 天皇のキサキの名前

### 第五章 院政時代における公家の名前

- 第一節 院政時代の公家の構成
  - 一、本論文における公家の定義
  - 二、院政時代の公家の構成
- 第二節 公家の名前
  - 一、外戚貴族の名前
  - 二、賜姓皇族の名前
  - 三、天皇の乳母及びその家族の名前
  - 四、院近臣及びその家族の名前

### 第六章 院政時代における武家の名前

- 第一節 院政と武士
  - 一、本論文における武家の定義
  - 二、武士の発生及び院政時代における武士の役割
- 第二節 武士及びその家族の名前
  - 一、武士の名前
  - 二、武士の家族の名前

## 第七章 摂関時代の個人名

### 第一節 摂関時代における天皇家の名称

- 一、天皇・親王・王の名称
- 二、内親王・女王の名称
- 三、天皇のキサキの名称

### 第二節 摂関時代における貴族の名称

- 一、本論文における貴族の定義及び摂関時代の貴族の構成
- 二、貴族の名称

## 第八章 平安時代前期の個人名

### 第一節 平安時代前期における天皇家の名称

- 一、嵯峨天皇の大改革
  - (一) 改革前の天皇家の名称
  - (二) 改革の背景
  - (三) 改革の内容
- 二、嵯峨天皇の大改革の影響及びその後の変遷

### 第二節 平安時代前期における貴族の名称

- 一、幼名の開始と系字の導入
- 二、系字から祖名の継承へ
- 三、兄弟における順位及び縁の地名に因んだ通称の普及

## 第九章 飛鳥・奈良時代の個人名

### 第一節 飛鳥・奈良時代における天皇家の名称

- 一、天皇の名称
- 二、皇・王子女の名称

### 第二節 飛鳥・奈良時代における貴族の名称

- 一、「〇子」型の名称の出現と変遷
- 二、制度による実名敬避及び臣諡の開始

## 終章

- 一、古代日本個人名体系の構築過程
- 二、古代日本の個人名の特徴
- 三、今後の展望

## 論文要旨

### 一、本研究の三つの視点

本論文では、主に以下の三つの視点を取り入れて日本人の名前（＝個人名）を研究した。

一番目は人名を特定の歴史時期において考えるという視点である。日本において、上皇が朝政を主導した院政時代は、荘園公領制の確立、国政での武家の地位の向上などの動きから、日本歴史上の一大転換期とされているが、この言い方は日本人の個人名の歴史においても適用される。というのは、個人名の付け方・構成・使用などの面を総合的に考慮すれば、院政時代を古代日本個人名体系の「集大成期」と位置づけられるからである。したがって、本論文では、院政時代を基準点かつ出発点として、院政時代を古代日本個人名体系の集大成期に比定することの妥当性を論証するために、日本個人名の歴史を撰関時代、平安時代前期、奈良・飛鳥時代へと遡っていったのである。

二番目は人名をその社会的身分に結びつけるという視点である。古代の日本社会は身分制社会であり、社会的身分は個人の全生活領域における行為を規定し、個人の標識ともなる名前もその身分に応じて変化しなけりばならなかつた。飛鳥時代から院政時代までの日本人の個人名の変遷を一言にまとめると、名前の種類とその役割分担が徐々に明確化してきた歴史である。個人の識別という名前の基本機能からすれば、一個人の名前の種類が多ければ多いほど、識別に支障をもたらすことになる。にもかかわらず、古代の日本人は何種類もの個人名を同時に持つことに喜びさえ覚えたのである。それは、個人名の数の変化はその社会的地位の変化に直結しているからである。例えば、国家の最高権力者である天皇ともなると、ほかの皇族との地位上の相違を表すために、天皇という地位に相応する新たな符号が必要となる。古代においては、天皇という地位の象徴となるものには通称や諡や追号といった種類の名前があり、同様に、天皇の座につく前の者と天皇の座から離れた者に対しても、それ相応の名前が用意され、それぞれ幼名と実名、院号と法名（出家した者に限る）である。こうした命名精神は一貫して古代社会に貫かれ、各身分の者がいくら個人名を変化させようとしても、その身分に相応することを大前提としなければならなかつたのである。言い換えると、古代日本人の個人名は社会的身分の表示という役割をも兼ねているため、身分の世襲と同時に伝承され、その結果、先祖と子孫の個人名には連続性が認められる。したがって、時代ごとに個人名を考察する際に、名前の所有者の社会的身分に基き、天皇家・公家・武家などに分けて、それぞれの特徴を捉えてみた。

三番目は同身分の中国人の同種類の個人名と比較するという視点である。日本と中国は共に東洋に属し、文化的には日本は中国から多大な影響を受け、文化的伝統や社会及び国民性などには、共通もしくは類似するところが比較的によく見受けられる。そのため、中国と日本の文化を論じる際に、両者の類似点が強調されすぎる傾向にあり、西洋人研究者の中に、日本文化は中国文化から派生したもので、両者の区別は必ずしも重要ではないと

考えている研究者さえいる。しかし、実際のところ、中国から伝来した漢字で表記されている日本の個人名と漢字の本場である中国の個人名一つをとっても、その付け方・構成・使用などの面において、大きな相違が見受けられる。とはいえ、中国においても日本においても自国の人名についての研究がなされてきているものの、他国の人名と比較したものが少なく、中日両国の人名研究は未だに平行線のままであると言える。そんな中、わずかながら中日人名の類似点と相違点を指摘したものもあるが、それらの指摘のほとんどは表面的な現象の比較によるものである。中国の崔世広氏が『日本文化研究方法論』の中で指摘されたように、現在の比較研究は「中国から日本に伝来したものと中国オリジナルのものとの比較するか、あるいは一見して高度の類似性を持つことがわかるもの同士の比較に限定されている。前者の場合は、儒教・仏教・書法・絵画などであり、後者の場合は、近代啓蒙思想などである。そうして、儒教と神道などのように、それぞれの土着的に成長した異質の文化を直接比較することはしない<sup>1</sup>」という。この指摘は日本の個人名研究にとっても示唆的であり、よって、本論文では、日本の個人名の特質をより顕在化させるために、前二種の方法のほかに、第三種の比較の方法をも取り入れたのである。

## 二、研究対象と研究方法

前述した通り、本研究の対象は飛鳥時代から院政時代までの日本人（ここで言う日本人とは歴史的人物のことであり、文学作品などに登場する虚構の人物が含まれていない）の名前（＝個人名）<sup>2</sup>である。ところが、一言で個人名と言っても、飛鳥時代から院政時代までの日本人の個人名には様々な種類があり、本論文では、幼名、実名、通称、字、号、諡、追号などを考察の対象とし、出家入道後に授けられる法名は、人間としての人格を捨てて仏となって永遠の仏格を得たことを表すもので、ほかの種類と性質が異なると思われるので、扱わないこととした。

また、本論文の作成にあたっては、先行研究の成果を最大限に活用するかたわら、できるだけ自分で原典資料にあたって名前の実例を収集することに努めた。名前の実例が記載されている文献は主に以下の三種類である。

### 1. 主に歴史的事実を記述したもの。

いわゆる実録のことであり、古文書、歴史書、古記録などがこの部類に入る。一部の例外を除き、そこに記載されている名前は特定の歴史人物を識別する符号として実在の人間に「使用」されているのである。この種の文献の中の名前に関する記述の特徴は、名前における様々な現象についての記述（出生、成人、葬儀などについての記録の中によく見られる）が多く、現象についての説明・評論が少ないことである。

### 2. 歴史的事実を題材にして、作者の創作をも加えたもの。

<sup>1</sup> 崔世広「日本文化研究方法論」（『日本学刊』1998-3期）pp. 68～82。

<sup>2</sup> 本論文では、特別な断りがない限り、名前という言葉はみな「個人名」のことを指している。

歴史物語、軍記物語、説話文学、随筆などがこの部類に入り、そこに記載されている名前の大多数は特定の歴史人物を識別する符号として実在の人間に「使用」されているものである。この種の文献の中の名前に関する記述の特徴は、名前における様々な現象のほかに、現象についての説明・評論も多いことである。

また、種々の実録から人名を抽出してその人名を家ごとにまとめあげた家系図は、名前における様々な現象の発生・発展・衰微・消滅の歴史的な過程を探るのに効果的な資料である。ただし、家系図の制作過程においては、史実を一次的に記録するという作業（つまり制作者が当代の人名などを書き記す作業）の前に、これまでに伝わる様々な資料を収集・整理して再編集するという作業（つまり制作者が当代以前の人名などを書き記す作業）をしなければならない。よって、家系図は二次的な記録であり、古文書や歴史書や古記録などの一次的な記録に対して、信憑性に限界があると思われる。この意味では、家系図をこの二番目の種類に入れるべきであろう。

### 3. ほとんど作者の創作によるもの。

歴史的事実を題材としない作り物語、小説などがこの部類に入り、そこに記載されている名前のほとんどは特定の虚構の人物を識別する符号として、文献に登場する人物のみ「使用」されているものである。この種の文献の中の名前に関する記述の特徴は、名前における様々な現象についての説明・評論のほかに、登場人物に対する作者の全体的な評価が名前に隠されていることが多いため、名前の種々の機能を顕在化させていることである。

「実録」（歴史学の言う「一次史料」に相当するもの）の記述をもとに作者の創作をも加えた「物語」においては、名前は時には人間像を浮き彫りにしたり、時代の風潮を反映したりしており、したがって、個人名の研究に際し、実録の利用はもちろんのこと、実録の記述に血肉を通わせた物語の利用も有効的であろう。この論文では、実録の中の名前記述の解読を軸としながら、必要に応じて史実を題材とした物語の中の名前記述とも比較をし、古代日本の個人名の各歴史時期における様々な様相を浮き彫りにしたのである。

## 三、各部・章の内容の概要

本論文は序章、第Ⅰ部（第一章～第二章）、第Ⅱ部（第三章～第九章）、終章からなっており、各部・章の内容は以下の通りである。

序章では、本研究の三つの視点、研究の対象と方法、先行研究について述べた。

第Ⅰ部では、個人名の基本的な考察を行った。まず、第一章では、個人名の伝える情報と果たす機能について述べた。人間の名前は主に二種類の情報を世の中に伝えており、す

なわち、個別の人名自体が伝える「実体情報」と、個別の人名が複数の関係人名と一緒に並べられることによって初めて伝える「関係情報」である。また、伝える情報の種類によって、個人名の機能が一次的なものや二次的なものに分けられ、筆者は、実態情報を伝える際に果たしているのは名前の「一次的な機能」（基本機能）であり、関係情報を伝える際に果たしているのは名前の「二次的な機能」（派生機能）であると考えている。従来の研究では、個人名の機能として様々なことが挙げられている。その中に、同じ機能が異なる言い方で表現されたため、異なる機能として扱われるものも少なくない。第一章では、筆者自身の日本と中国の人名に対する研究を基にしながら、これまでの日本と中国の研究成果をも踏まえた上で、個人名の果たす機能を「個体の識別」、「交流の手段」、「社会的分類」、「社会的整合」、「社会的分類と整合による制御と支配」、「社会的記憶の創出と補充」、「自民族の名詞システムの構築と補完」の七つにまとめてみた。中に、「個体の識別」と「交流の手段」は人間が個人名に付与する「一次的な機能」（基本機能）であり、この二つの機能さえ果たせれば、名前は天命を全うすることになる。この場合、真実はともあれ、名前が何らかの情報を提供してくれたことにこそ意味があり、その情報はつまり実体情報である。一方、複数の名前は関係情報をも提供してくれるが、関係情報の伝達の際に働いているのは名前の「二次的な機能」（派生機能）である。ここで「二次的」という言葉を使っているのは、これらの機能は基本機能（一次的な機能）から派生したものであり、命名者や名前の使用者に共通的に認識されることはなく、名前を特定の時間・空間の中に（言い換えると、名前を何らかの「関係」の中に）において考える際に初めて意識されるようになる機能だからである。「社会的分類」、「社会的整合」、「社会的分類と整合による制御と支配」、「社会的記憶の創出と補充」、「自民族の名詞システムの構築と補完」という五つの機能は個人名の「二次的な機能」であると思われる。

そして、第二章では、考察の対象を日本の個人名に限定し、その構成要素と種類について述べた。日本人の個人名は音声と文字との二要素からなっており、その中に根源的なのは音声である。しかし、科学技術の発達しない時代においては、音声は瞬間的なものにとどまり、永続することは難しかった。音声だけの名前が忘失されやすいため、日本人は文字で名前を表記するようになり、それで何千年も前の人名が今日に伝わったのである。この意味では、音声と文字のいずれかが欠けても、日本人の名前が成り立たないのだと言える。また、人間は人生の異なる時期・異なる生活空間において、異なる「社会的身分」を持っており、社会的身分の変化は時には個人名の変化をもたらしてくる。日本人の生涯の様々な節目の中に、常に命名の儀式が伴っているのは、出生と死亡の時である。この意味では、日本人の個人名を生前の名前と死後の名前とに大別することができ、生前の名前には、幼名・実名・通称・字・別号・法名などがあり、死後の名前には、諡・追号などがある。この章では上掲した種類の名前を概説した。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部での基礎的な考察を踏まえ、前掲した「歴史と人名」・「社会的身分

と人名」・「中国人名との比較」という本研究の三つの視点に基づいて古代日本人の個人名を考察した。まず、第三章では日本の個人名史における院政時代の意義を提示した。日本史の時代区分の一つである「院政時代」は、退位した天皇が朝政を主導する院政が国政の基本形態として確立したことを指標に設定された。この時代において、荘園公領制が確立され、国政での武家の地位が向上して、中世の秩序が確立しつつあった。この意味では、院政時代は古代の残光と中世の曙光を共に内包する日本歴史上の一大転換期であると言える。一方、日本の個人名の歴史においては、名づけ方・構成・使用などの面から総合的に考慮すれば、この時代を「古代日本個人名体系の集大成期」と位置づけることができる。したがって、第四章～第九章では、院政時代を出発点として（といっても、この時代の個人名を日本の個人名の一つの到達点として考えているわけではない）、この時代の個人名に見られる各特徴がいつ発生し、いかなる変遷を辿ってきたかという問題点を抱きながら、日本人名の歴史を摂関時代、平安時代前期、奈良・飛鳥時代へと遡っていった。

その結果、「古代日本個人名体系」の構築過程が明らかになった。

飛鳥・奈良時代は古代日本個人名体系の「萌芽期」であり、この時代において、それまでに「一人歩き」してきた日本の個人名は、国家の統一を背景に、周辺諸国との交渉の需要に応じて、交流の手段となり得るように変身させられたのである。（第九章の考察による）

平安時代前期は古代日本個人名体系の「発生期」であり、この時代において、前代以来の人的交流によって移入されてきた中国の人名文化の精髓が次第に消化・吸収され、日本の個人名は、中国人名の種々の概念・法則を移植する、そしてそれらの法則と日本従来の諸制度とを融合させる段階から、中国人名の法則を借用して従来の日本人名の諸概念を中国風に変える段階に入ったのである。（第八章の考察による）

摂関時代は古代日本個人名体系の「発展期」であり、この時代において、中国との人的交流が減少しはじめたため、中国の新しい人名文化を摂取するためには、典籍を頼りにするしかなかった。ただし、摂関時代は中国の宋代に当たり、西夏や遼と対峙して対外政策に苦慮していた宋王朝は、国内事情の漏洩を恐れて、正史・実録といった書物の国外輸出を厳しく禁じていた。このことを背景に、日本人が宋代の人名文化に触れる機会が少なく、それ故、日本の個人名は独自に発展する段階に入ったのである。（第七章の考察による）

院政時代は古代日本個人名体系の「集大成期」であり、この時代において、個人名のことを名実一体観という原点に立ち返って考える習慣を身につけた日本人は、先行する三つの時代に現出した様々な人名現象を融合させ、それによって、中国とは異なる個人名の体系が遂に形成されたのである。（第四～六章の考察による）

#### 四、結論と今後の展望

第Ⅱ部での考察により、古代日本個人名体系の構築過程において、日本人は中国の人名文化を大量に移入し、しかも、かなり早い時期（飛鳥後期）から盲従の段階を脱して、自国の国情に合致するように、中国人名文化の諸要素を日本風アレンジしてきた。その結

果、古代日本の個人名には、中国の個人名にはないいくつかの特徴が現れ、それらの特徴を列記すると、以下のようになる。

- (1) 男女の差があまりない
- (2) 社会的身分との結びつきが強い
- (3) 体を現す実名の発達と志を表す字・号の未発達
- (4) 形式よりも実用性が重んじられる
- (5) 時代思潮が字面に映されることが少ない

現代の日本社会において、人間は産声を上げてこの世に生まれる時から、他人と区別されるように名前が与えられ、そして、成長するとその名前を以って社会に入り、社会生活を営んでいくことになるが、社会生活の中で、人の名前は主に個人の識別という一次的な機能を果しているため、その「価値」が単に「符号」という一言にまとめられることが多い。ところが、本論の中で具体的に見てきたように、古代の日本社会において、個人の名前は決して単なる符号として見なされたのではなく、その命定・使用が大和民族の物質及び精神生活の欠かせない一部分となっており、政治・経済・文化といった面で重要な役割を果してきた。こうした個人名は単なる人間を指す符号どころか、もはや一種の「文化」ともなっているのではないかと筆者は考えている。本論文では、そうした「文化」に対する考察を通して、そこに映し出されている古代日本社会の幾つかの側面を提示してみた。ただし、考察の対象を古代日本の天皇家・貴族・武家に限定したため、提示できたのはあくまでも一定の歴史時期における一部の特権階級の生活風景であり、それ以外の者の生活風景を窺い知るためには、更なる研究をしなければならず、それを今後の課題としたい。

最後に、この場を借りて今後の日本人の個人名研究について、一つの提言をしてみたい。つまり、本論文の作成にあたって、『尊卑分脈』をはじめとする系図を活用したが、いずれの系図も実名を中心に書かれているため、実名未詳の者（その中に女性が圧倒的に多い）の名前の研究には向かない資料である。しかし、古代日本人の名前は実名という一種類しかないのではなく、同一集団の同一種類の名前を線で繋げてみれば、きっと興味深い何かが見えてくるのであろう。実際に、奥富敬之氏は、北条氏・足利氏・細川氏・佐竹家・徳川家などの武家の幼名を系図化し、それによって、院政時代末期以来、武家では幼名にも通字が付けられるようになったことが明らかになったのである<sup>3</sup>。このような方法は今後の日本の個人名研究に大いに生かされるべきだと思われる。

---

<sup>3</sup> 奥富敬之『苗字と名前を知る字典』東京堂出版、2007、pp. 197～201。

## 参考文献

### 〈日本語文献〉

#### ☆一次資料

- ・ 倉野憲司・武田祐吉／校注『古事記・祝詞』日本古典文学大系 1、岩波書店、1958
- ・ 秋本吉郎／校注『風土記』日本古典文学大系 2、岩波書店、1958
- ・ 坂本太郎・他／校注『日本書紀』(上・下) 日本古典文学大系 67・68、岩波書店、1967・1965
- ・ 青木和夫・他／校注『続日本紀』(1~5) 新日本古典文学大系 12~16、岩波書店、1989~1998
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『日本後紀・続日本後紀・日本文徳天皇実録』国史大系 3、吉川弘文館、1966
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『日本三代実録』国史大系 4、吉川弘文館、1966
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『類聚国史』(前篇・後篇) 国史大系 5・6、吉川弘文館、1965
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『本朝世紀』国史大系 9、吉川弘文館、1965
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『日本紀略』(前篇) 国史大系 10、吉川弘文館、1965
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『日本紀略(後篇)・百鍊抄』国史大系 11、吉川弘文館、1965
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『扶桑略記・帝王編年記』国史大系 12、吉川弘文館、1965
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『今鏡・増鏡』国史大系 21 下、吉川弘文館、1965
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『律・令義解』国史大系 22、吉川弘文館、1966
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『令集解』(前篇・後篇) 国史大系 23・24、吉川弘文館、1966
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『類聚三代格・弘仁格抄』国史大系 25、吉川弘文館、1965
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『交替式・弘仁式・延喜式』国史大系 26、吉川弘文館、1965
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『吾妻鏡』(前篇・後篇) 国史大系 32・33、吉川弘文館、1964・1965
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『尊卑分脈』(1~4)、国史大系 58~60(下)、吉川弘文館、1966~1967
- ・ 佐竹昭広・他／校注『万葉集』(1~3) 新日本古典文学大系 1~3、岩波書店、1999~2002
- ・ 黒板勝美・国史大系編修会／編『公卿補任』(1~5) 国史大系 53~57、吉川弘文館、1964~1965

- ・橘健二／校注『大鏡』日本古典文学全集 20、小学館、1974
- ・藤岡忠美・他／校注『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』日本古典文学全集 18、小学館、1971
- ・長谷川政春・他／校注『土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記』新日本古典文学大系 24、岩波書店、1989
- ・佐竹昭広・久保田淳／校注『方丈記・徒然草』新日本古典文学大系 39、岩波書店、1989
- ・永積安明・島田勇雄／校注『保元物語・平家物語』日本古典文学大系 31、岩波書店、1961
- ・松村博司・山中裕／校注『栄花物語』（上・下）日本古典文学大系 75・76、岩波書店、1964・1965
- ・岡見正雄・赤松俊秀／校注『愚管抄』日本古典文学大系 86、岩波書店、1986
- ・東京大学史料編纂所／編『大日本古文書』（編年之一）、東京大学出版会、1901
- ・竹内理三／編『平安遺文』（古文書編 1～11）、東京堂出版、1963～1964
- ・東京大学史料編纂所／編『御堂関白記』（上・中・下）大日本古記録第 1、岩波書店、1953
- ・東京大学史料編纂所／編『九暦』大日本古記録第 9、岩波書店、1958
- ・増補史料大成刊行会／編『小右記』（1～3）増補史料大成別巻 1～3、臨川書店、1975
- ・増補史料大成刊行会／編『権記』（1・2）増補史料大成 4・5、臨川書店、1965
- ・増補史料大成刊行会／編『左経記』増補史料大成 6、臨川書店、1965
- ・増補史料大成刊行会／編『春記・春記脱漏及補遺』増補史料大成 7、臨川書店、1965
- ・増補史料大成刊行会／編『水左記』増補史料大成 8、臨川書店、1965
- ・増補史料大成刊行会／編『中右記』（1～7）増補史料大成 9～15、臨川書店、1965
- ・増補史料大成刊行会／編『長秋記』（1・2）増補史料大成 16・17、臨川書店、1965
- ・増補史料大成刊行会／編『兵範記』（1～5）増補史料大成 18～22、臨川書店、1965
- ・増補史料大成刊行会／編『台記』（1・2）増補史料大成 23・24、臨川書店、1965
- ・増補史料大成刊行会／編『台記別記』増補史料大成 25、臨川書店、1965
- ・増補史料大成刊行会／編『山槐記』（1～3）増補史料大成 26～28、臨川書店、1965
- ・増補史料大成刊行会／編『吉記』（1・2）増補史料大成 29・30、臨川書店、1965
- ・九条兼実／著『玉葉』名著刊行会、1984
- ・岸谷誠一／校訂『平治物語』岩波書店、1934
- ・梶原正昭・山下宏明／校訂『平家物語』（四）岩波書店、1999
- ・島津久基／校訂『義経記』岩波書店、1939
- ・塙保己一／編『群書類従』（第 2 輯・帝王部；第 4 輯・系譜部）、経済雑誌社、1898
- ・塙保己一／原編；太田藤四郎／補編『続群書類従』（第 5 輯上～第 7 輯下）、続群書類従完成会、1957～1959
- ・本居宣長『古事記伝』（大野晋／編『本居宣長全集』（第九卷～第十二卷）、筑摩書房、1976）
- ・飯田武郷『日本書紀通釈』（第 1～第 5）、内外書籍、1930
- ・神宮司庁／編『古事類苑』姓名部、吉川弘文館、1985

- ・帝国学士院／編『皇室制度史』(第六卷)、帝国学士院、1945
- ・吉田賢抗『論語』新訳漢文大系 1、明治書院、1991
- ・竹内照夫『礼記』(上) 新訳漢文大系 27、明治書院、1971
- ・鈴木由次郎『易経』(下) 全訳漢文大系 10、集英社、1974
- ・井上秀雄・他／訳注『東アジア民族史 1——正史東夷伝』(全二卷) 平凡社、1974
- ・石原道博／編訳『新訂魏志倭人伝・他三篇』岩波書店、1985
- ・小野郊一『文選』(文章編) 五、全訳漢文大系 30、集英社、1975
- ・施耐庵／作・駒田信二／訳『水滸伝』(上) 中国古典文学大系第 28 卷、平凡社、1967
- ・笑笑生／作；小野忍・千田九一／訳『金瓶梅』(上) 中国古典文学大系第 33 卷、平凡社、1967
- ・曹霑／作・伊藤漱平／訳『紅樓夢』(上) 中国古典文学大系第 44 卷、平凡社、1969
- ・趙翼／著・長澤規矩也／編『廿二史劄記』和刻本正史別卷之八、古典研究会、1973

#### ☆単行本

- ・穂積陳重『実名敬避俗研究』刀江書院、1926
- ・渡辺三男『日本人の名まえ』北辰堂、1958
- ・渡辺三男『日本の人名』毎日新聞社、1967
- ・渡辺三男『日本人の姓名』ぎょうせい、1982
- ・阿部武彦『氏姓』至文堂、1960
- ・角田文衛『王朝の映像』東京堂出版、1970
- ・角田文衛『日本の女性名』(上) 教育社、1980
- ・森三樹三郎『「名」と「恥」の文化』講談社、1971
- ・高梨公之『名前のはなし』東京書籍、1981
- ・黒木三郎・村武精一・頼野精一郎『家の名・族の名・人の名——氏』三省堂、1988
- ・豊田国夫『日本人の言霊思想』講談社、1980
- ・豊田国夫『名前の禁忌習俗』講談社、1988
- ・寿岳章子『日本人の名前』大修館書店、1990
- ・丹羽基二『知ったら驚く名前の由来と祖先の秘密』、廣済堂出版、1992
- ・鈴木棠三『言葉と名前』秋山書店、1992
- ・田中克彦『名前と人間』岩波書店、1996
- ・奥富敬之『日本人の名前の歴史』新人物往来社、1999
- ・奥富敬之『名字の歴史学』角川書店、2004
- ・奥富敬之『苗字と名前を知る字典』東京堂出版、2007
- ・上野和男・森謙二／編『名前と社会——名付けの家族史』早稲田大学出版部、1999
- ・星田晋五『名前の研究』近代文芸社、2002
- ・坂田聡『苗字と名前の歴史』吉川弘文館、2006

- ・日置昌一／編『日本系譜綜覧』講談社、1990
- ・日置昌一／編『日本歴史人名辞典』講談社、1990
- ・米田雄介／編『歴代天皇・年号事典』吉川弘文館、2003
- ・島村修治『外国人の姓名』帝国地方行政学会、1971
- ・21世紀研究会／編『人名の世界地図』文藝春秋、2001
- ・松本脩作・大岩川嫩『第三世界の姓名——人の名前と文化』明石書店、1994
- ・クロード・レヴィ＝ストロース／著・大橋保夫／訳『野生の思考』みすず書房、1976
- ・フレーザー／著；永橋卓介／訳『金枝篇』（二）岩波書店、1996
- ・児玉幸多『日本史小百科＜天皇＞』東京堂出版、1993
- ・高橋富雄『義経伝説』中央公論社、1966
- ・渡辺保『源義経』人物叢書（新装版）、吉川弘文館、1986
- ・五味文彦『源義経』岩波書店、2004
- ・藤堂保明『漢字の起源』現代出版、1983
- ・関根正直『禁秘抄講義』（訂正版）中、六合館、1927
- ・仁井田陞『中国法制史』岩波書店、1952
- ・中田薫『法制史論集』（一卷）岩波書店、1956
- ・原田敏明『宗教と民俗』東海大学出版社、1970
- ・加地伸行『沈黙の宗教——儒教』筑摩書房、1994
- ・村井章介・佐藤信・吉田伸之／編『境界の日本史』山川出版社、1997
- ・石井進・他／著『詳説日本史』山川出版社、2003
- ・渡部正一『日本古代・中世の思想と文化』大明堂、1980
- ・古田武彦『古代は輝いていたⅢ——法隆寺の中の九州王朝』朝日新聞社、1985
- ・江上波夫『騎馬民族国家』中央公論新社、1991
- ・水野祐『日本古代王朝史論序説』（新版）水野祐著作集一、早稲田大学出版部、1992
- ・井上光貞『日本国家の起源』岩波書店、1960
- ・井上光貞『日本古代国家の研究』岩波書店、1965
- ・林陸朗『上代政治社会の研究』吉川弘文館、1969
- ・山田英雄『日本古代史攷』岩波書店、1987
- ・直木孝次郎『奈良時代史の諸問題』塙書房、1968
- ・直木孝次郎『飛鳥奈良時代の研究』塙書房、1975
- ・吉田孝『律令国家と古代の社会』岩波書店、1983
- ・赤木志津子『平安貴族の生活と文化』講談社、1964
- ・橋本義彦『平安貴族社会の研究』吉川弘文館、1976
- ・橋本義彦／編『古文書の語る日本史』2・平安、筑摩書房、1991
- ・橋本義彦『平安貴族』平凡社、1996
- ・橋本義彦『平安の宮廷と貴族』吉川弘文館、1996

- ・河野房雄『平安末期政治史研究』東京堂出版、1979
- ・藤木邦彦『平安王朝の政治と制度』吉川弘文館、1991
- ・保立道久『平安王朝』岩波書店、1996
- ・黒板伸夫『撰関時代史論集』吉田弘文館、1980
- ・五味文彦『院政期社会の研究』山川出版社、1984
- ・元木泰雄『院政期政治史研究』思文閣出版、1996
- ・元木泰雄／編『院政の展開と内乱』日本の時代史7、吉川弘文館、2002
- ・佐藤進一『日本の中世国家』岩波書店、1983
- ・溝口睦子『古代氏族の系譜』吉川弘文館、1987
- ・荒木敏夫『日本古代の皇太子』吉川弘文館、1985
- ・田中嗣人『聖徳太子信仰の成立』吉川弘文館、1986
- ・田中貴子『聖なる女——斎宮・女神・中将姫』人文書院、1996
- ・西郷信綱『源氏物語を読むために』平凡社、1983
- ・高群逸枝『招婿婚の研究』1・2（橋本憲三／編『高群逸枝全集』第2・3巻、理論社、1966所収）
- ・服藤早苗『家成立史の研究——祖先祭祀・女・子ども』校倉書房、1991
- ・服藤早苗『平安王朝社会のジェンダー』校倉書房、2005
- ・吉海正人『平安朝の乳母達——『源氏物語』への階梯』世界思想社、1995
- ・新田孝子『栄花物語の乳母の系譜』風間書房、2003
- ・田端孝子『乳母の力——歴史を支えた女たち』吉川弘文館、2005
- ・高橋崇『藤原氏物語』——栄華の謎を解く、新人物往来社、1998
- ・萩谷朴『枕草子解環』（四）、同朋社、1981
- ・高橋秀樹『中世の家と親族』吉川弘文館、1996
- ・成清弘和『日本古代の王位継承と親族』岩田書院、1999
- ・成清弘和『日本古代の家族・親族——中国との比較を中心として』岩田書院、2001
- ・竹内誠／監修『世襲について——芸術・芸能篇』日本実業出版社、2002
- ・専修大学・西北大学共同プロジェクト『遣唐使の見た中国と日本——新発見「井成真墓誌」から何がわかるか』朝日新聞社、2005
- ・金丸邦三／主編『日中ことわざ対照集』燎原書店、1983
- ・馮驥才／作・納村公子／訳『三寸金蓮』亜紀書房、1988

## ☆論文

- ・栗田寛「古人名称考」（『栗里先生雑著』（三）現代思潮社、1980）
- ・前田太郎「動物名に因んだ古代の人名」（日本歴史地理研究会／編『歴史地理』29-4、1917）
- ・喜田貞吉「「あぐり」といふ名、「あぐり」といふ姓」（日本学術普及会／編『民族と歴史』

2-2、1919)

- ・稲垣光晴「朝鮮童名考」(上・下)(日本学術普及会／編『民族と歴史』8-6、『社会史研究』9-1、1922・1923)
- ・喜田貞吉「マロといふ名の変遷」(上・下)(日本学術普及会／編『社会史研究』10-2・3、1923)
- ・南方熊楠「トーテムと「命名」」(『南方熊楠全集』(第七卷)乾元社、1952)
- ・坂本太郎「列聖漢風諡号の選進について」(『日本古代史の基礎的研究(下)制度編』東京大学出版会、1964)
- ・和田萃「殯の基礎的考察」(史学研究会／編『史林』52-5、1969)
- ・直木孝次郎「古代における皇族名と国郡名との関係」(日本歴史学会／編『日本歴史』284、1972)
- ・田村竹二「禅僧の法諱に就て」(『日本禅宗史論集』(卷上)思文閣、1976)
- ・森岡健二「日本人の名前」(『言語』58、大修館書店、1977)
- ・吉田孝「祖名について」(土田直鎮先生還暦記念会／編『奈良平安時代史論集』(上卷)吉川弘文館、1984)
- ・飯沼賢司「人名小考——中世の身分・イエ・社会をめぐって」(竹内理三先生喜寿記念論文刊行会／編『荘園制と中世社会』竹内理三先生喜寿記念論文集(下卷)東京堂、1984)
- ・飯沼賢司「『職』と家の成立」(『歴史学研究』五三四、1984)
- ・遠藤好英「命名と漢字・仮名」(『漢字講座』4、明治書院、1989)
- ・土田直鎮「平安中期に於ける記録の人名表記法」(『奈良平安時代史研究』吉川弘文館、1992)
- ・榎村寛之「諡号より見た古代王権継承意識の変化」(岡田精司／編『古代祭祀の歴史と文学』塙書房、1997)
- ・片岡直樹「持統天皇の呼称に関する一考察」(日本宗教文化史学会／編『日本宗教文化史研究』3-1、1999)
- ・中山千尋「天皇の諡号と皇統意識——漢風諡号の成立をめぐって」(日本歴史学会／編『日本歴史』622、2000)
- ・土岐陽美「中大兄皇子の「中」に関する一考察」(日本歴史学会／編『日本歴史』623、2000)
- ・松木俊暁「「祖名」と部民制——大和政権における人格的支配の構造」(史学会／編『史学雑誌』111-3、2002)
- ・義江明子「推古天皇の讚え名“トヨミケカシキヤヒメ”をめぐる一考察」(帝京大学文学部史学科／編『帝京史学』17、2002)
- ・堀田幸義「近世武家社会における実名敬避俗と禁字法令——仙台藩を事例に」(史学会／編『史学雑誌』112-10、2003)
- ・富田正弘「中世史料論」(『岩波講座日本通史』(別巻3)岩波書店、1995)

- ・村井章介「中世史料論」(『古文書研究』(五十) 1999)
- ・布村一夫「家族共同体論——「籍帳」における父系的兄弟的家族共同体のために」(佐々木潤之介／編『家族史の方法』日本家族史論集 1、吉川弘文館、2002)
- ・吉岡眞之「古代人の通過儀礼」(『岩波講座・日本通史 6』古代 5、岩波書店、1995)
- ・服藤早苗「元服と家の成立過程」(前近代女性史研究会／編『家族と女性の歴史 古代・中世』吉川弘文館、1989)
- ・堀裕「天皇の死の歴史的位——「如在之儀」を中心に」(史学研究会／編『史林』81—1、1998)
- ・佐藤長門「古代天皇制の構造とその展開」(歴史学研究会／編『歴史学研究』755、2001)
- ・山本一也「日本古代の近親婚と皇位継承——異母兄妹婚を素材として」(上・下)(古代学協会／編『古代文化』53—8・9、2001)
- ・官文娜「日本古代社会における王位継承と血縁集団の構造——中国との比較において」(国際日本文化研究センター／編『日本研究』28、2004)
- ・富田節子「平安時代中期に於ける立后事情と外戚関係——特に道長の場合を中心として」(論集日本史刊行会・林睦朗／編『平安王朝』有精堂出版株式会社、1976)
- ・梅村恵子「天皇家における皇后の位置——中国と日本との比較」(伊東聖子・河野信子／編『女と男の時空——日本女性史再考<Ⅱおんなとおとこの誕生——古代から中世へ>』藤原書店、1996)
- ・吉川真司「天皇家と藤原氏」(『岩波講座・日本通史 5』古代 4、岩波書店、1995)
- ・下向井龍彦「国衙と武士」(『岩波講座・日本通史』第 6 卷・古代 5、岩波書店、1995)
- ・五味文彦「院政と天皇」(『岩波講座・日本通史』第 7 卷・中世 1、岩波書店、1993)
- ・石丸熙「院政の構造的性質について——十二世紀受領層の動向を中心に」(論集日本史刊行会・林睦朗／編『平安王朝』有精堂出版株式会社、1976)
- ・和田英松「歴史上に於ける乳母の勢力」(『国史国文の研究』雄山閣、1926)
- ・秋山喜代子「乳父について」(史学会／編『史学雑誌』99—7、1990)
- ・秋山喜代子「養君にみる子どもの養育と後見」(片倉比佐子／編『教育と扶養』日本家族史論集 10、吉川弘文館、2003)
- ・西谷正浩「撰閥家にみる中世的『家』の展開」(九州史学研究会／編『九州史学』99・101、1991)
- ・梅村恵子「撰閥家の正妻」(義江明子／編『婚姻と家族・親族』日本家族史論集 8、吉川弘文館、2002)
- ・西野悠紀子「律令制下の氏族と近親婚」(女性史総合研究会／編『日本女性史』1、東京大学出版会、1982)
- ・義江明子「古系譜にみる「オヤーコ」観と祖先祭祀——「家」の非血縁原理の原型を求めて」(義江明子／編『親族と祖先』日本家族史論集 7、吉川弘文館、2002)
- ・江守五夫「母系制と妻訪婚——社会人類学の立場から」(義江明子／編『婚姻と家族・親

- 族』日本家族史論集 8、吉川弘文館、2002)
- ・ 関口祐子「日本古代の婚姻形態について——その研究史の検討」(歴史科学協議会／編『歴史評論』 311、1976
  - ・ 関口裕子「日本の婚姻」(義江明子／編『婚姻と家族・親族』日本家族史論集 8、吉川弘文館、2002)
  - ・ 久留島典子「婚姻と女性の財産権」(義江明子／編『婚姻と家族・親族』日本家族史論集 8、吉川弘文館、2002)
  - ・ 栗原弘「古代の離婚における女性の地位について」(義江明子／編『婚姻と家族・親族』日本家族史論集 8、吉川弘文館、2002)
  - ・ 明石一紀「古代・中世の家族と親族」(大日方純夫／編『家族史の展望』日本家族史論集 2、吉川弘文館、2002)
  - ・ 明石一紀「鎌倉武士の「家」——父系集団から単独的イエへ」(伊東聖子・河野信子／編『女と男の時空——日本女性史再考<Ⅱおんなとおとこの誕生——古代から中世へ>』藤原書店、1996)
  - ・ 杉本一樹「日本古代家族研究の現状と課題——関口裕子・吉田孝・明石一紀説を中心に」(大日方純夫／編『家族史の展望』日本家族史論集 2、吉川弘文館、2002)
  - ・ 五味文彦「中世の家と家父長制」(『家と家父長制』<シリーズ比較家族 1>早稲田大学出版部、1992
  - ・ 瀬地山角「家父長制をめぐる」(佐々木潤之介／編『家族史の方法』日本家族史論集 1、吉川弘文館、2002)
  - ・ 榎本淳一「『国風文化』と中国文化——文化移入における朝貢と貿易」(池田温／編『古代を考える・唐と日本』吉川弘文館、1992)
  - ・ 崔世広「日本文化研究方法論」(『日本学刊』1998-3期)
  - ・ 平勢隆郎「殷周時代の王と諸侯」(『岩波講座』世界歴史 3・中華の形成と東方世界、岩波書店、1998 所収)

## 〈中国語文献〉

### ☆一次資料

- ・〔漢〕鄭玄注〔明〕金蟠・葛籛訂『儀禮』(冊二)、中華書局、1965
- ・〔漢〕許慎撰〔清〕段玉裁注『說文解字注』上海古籍出版社、1988
- ・〔晉〕郭璞傳〔清〕郝懿行箋疏『山海經箋疏』中華書局、1965
- ・〔漢〕司馬遷撰〔宋〕裴駟集解〔唐〕司馬貞索隱〔唐〕張守節正義『史記』(全10冊)中華書局、1959
- ・〔漢〕班固撰〔唐〕顏師古注『漢書』(全12冊)中華書局、1962
- ・〔宋〕范曄撰〔唐〕李賢等注『後漢書』(全12冊)中華書局、1965
- ・〔北齊〕魏收撰『魏書』(全8冊)中華書局、1974
- ・〔唐〕魏徵・令孤德棻撰『隋書』(全6冊)中華書局、1973
- ・〔唐〕李延壽撰『南史』(全6冊)中華書局、1975
- ・〔後晉〕劉昫等撰『舊唐書』(全16冊)中華書局、1975
- ・〔宋〕歐陽修・宋祁撰『新唐書』(全20冊)中華書局、1975
- ・〔唐〕白居易／著・朱金城／箋校『白居易集箋校』(二)、上海古籍出版社、1988
- ・劉學鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』(第三冊)中國古典文學基本叢書、中華書局、1988
- ・〔宋〕鄭樵著〔明〕陳宗夔注『通志略』(冊二)、中華書局、1965
- ・曹雪芹／著・馮其庸／重校評批『紅樓夢』(上)、遼寧人民出版社、2005
- ・徐珂『清稗類鈔』(姓名類)台灣商務印書館、1983

### ☆單行本

- ・蕭遙天『中國人名的研究』國際文化出版公司、1987
- ・趙瑞民『姓名與中國文化』海南人民出版社、1988
- ・張聯芳／主編『外國人的姓名』中國社會科學出版社、1987
- ・張聯芳／主編『中國人的姓名』中國社會科學出版社、1992
- ・金良年『姓名與社會生活』文津出版社、1990
- ・中國社會科學院語言文字應用研究所漢字整理研究室／編『姓氏人名用字分析統計』語文出版社、1991
- ・袁庭棟『古人稱謂漫談』中華書局、1994
- ・汪受寬『諡法研究』(中國傳統文化研究叢書)上海古籍出版社、1995
- ・納日碧力戈『姓名論』社會科學文獻出版社、1997
- ・納日碧力戈『姓名』中央民族大學出版社、2000
- ・王鶴鳴等／主編『中國家譜研究』上海古籍出版社、1999
- ・王泉根『中國姓氏的文化解析』團結出版社、2000
- ・王泉根『中國人名文化』團結出版社、2000

- 郭得山『說姓道名』杭州出版社、2001
- 完顏紹元『中国姓名文化』上海古籍出版社、2001
- 何曉明『姓名与中国文化』人民出版社、2001
- 王大良『姓氏探源与取名艺术』气象出版社、2001
- 汪澤樹『姓氏·名号·別称——中国人物命名習俗』四川人民出版社、2003
- 楊寬『古史新探』中華書局、1965
- 林耀華『原始社会史』中華書局、1984
- 何星亮『中国图腾文化』中国社会科学出版社、1992
- 王玉波『中国古代的家』商務印書館国际有限公司、1995
- 顧鑒塘·顧鳴塘『中国歷代婚姻与家庭』商務印書館、1996
- 李衡眉『昭穆制度研究』齊魯書社、1996
- 錢杭『血緣与地緣之間——中国歷史上的聯宗与聯宗組織』上海社会科学院出版社、2001
- 王勇／主編『中日關係史料与研究』（第一輯）北京圖書館出版社、2002
- 王勇·他／著『中日「書籍之路」研究』北京圖書館出版社、2003
- 李卓『中日家族制度比較研究』人民出版社、2004
- 楊柳『李商隱評傳——詩人的生死愛恨及其創作藝術』木鐸出版社、1985
- 李時人『金瓶梅新論』学林出版社、1991
- 程裕禎『中国文化要略』外語教学与研究出版社、1998

## ☆論文

- 范玉梅「我国少数民族的人名」（『民族研究』1981（5））
- 楊希枚「論先秦所謂姓及其相關問題」（『中国史研究』1984年第3期）
- 楊希枚「論久被忽略的『左傳』諸侯以字為諡之制」（『中国史研究』1987年第4期）
- 張德鑫「生肖文化探」（耿龍明·何審／主編『中国文化与世界』（論文集）上海外语教育出版社、1992）
- 馬馳「試論蕃人仕唐之盛及其姓名之漢化」（鄭学檬·冷敏述／主編『唐文化研究論文集』上海人民出版社、1994）
- 李学勤「先秦人名的幾個問題」（『古文献叢論』上海遠東出版社、1996）
- 巖紹盪「日本における中国典籍」（蔡毅／編『日本における中国伝統文化』勉誠出版、2002）